

馬琴の小説作法と小津桂窓の文学的営為

論文審査の結果の要旨

本論文は、生涯にわたり厩大な作品を生み出した読本作家滝沢馬琴の創作活動について、作品分析と交友関係の検討という二つの方向から明らかにしようとしたものである。

第一章では小津桂窓の紀行文について、具体的な検討がなされている。桂窓は、馬琴の友人として、さらには蔵書家として知られるが、本居春庭の門弟として重きをなし、四十を超える紀行文をも残したことは、ほとんど知られていない。馬琴との交流については、第二章において詳細な検討がなされ、馬琴が桂窓の紀行文を読み、「大才子」と激賞したことを機に親交が深まったことが明らかにされているが、桂窓の紀行文そのものについての研究は、皆無であった。そのため第一章では、そのような桂窓の紀行文から「みたけのしをり」「花鳥日記」「陸奥日記」の三作品を取り上げ、豪商であった桂窓が松阪の地において本居家を中心とする文化共同体の形成に深くかかわっていたこと、しかしその後本居流の古学からの離脱を言明するようになり、そのことが達意の文章でもって実用に堪えることを第一の目的とする桂窓独自の紀行文のスタイルを獲得させるに至ったことを明らかにしている。こうして文学史的には無名に近かった桂窓が、近世後期を代表する紀行文作者として位置づけられる端緒が開かれることとなった。なお、桂窓の紀行文は、そのすべてに自筆本が残されており、第一級の資料であるが、従来はまったく注目されることがなかった。そのため三作品については資料編として、とくに翻刻が添えられている。

第二章では、馬琴側の資料のみから捉えられていた桂窓との交流が、桂窓の紀行文への馬琴の親炙の事実の発掘により、互いに得意とするところを伝え合う、近世知識人同士の相互交流として捉え直されている。

第三章では馬琴の創作手法について、具体的な検討がなされている。第一節では、読本『三七全伝南柯夢』の執筆に際し、あらかじめ『敵討兇手柏』という合巻を書き終え、そこで用いた趣向を改めて導入するという、用意周到な馬琴の創作姿勢を明らかにしている。第二節では、馬琴の読本に必ずといってよいほどに描かれる、悪人が改心して善人になる、あるいは悪人の振りをしてきた人物が実は善人であったことを明かすといった趣向が、近世演劇でいうところの〈もどり〉の趣向に学んだものであること証明するため、馬琴のすべての読本を対象に、演劇との直接的な影響関係について検討を加えている。その結果、十六作の読本に〈もどり〉の趣向が見られるとし、それぞれの典拠をも明らかにしている。馬琴の読本は未だに『南総里見八犬伝』等代表的なものしか活字化されていない中、そのすべてを精査・検討した労作である。第三節では、「水滸伝」の宋江等に「本然の善」を見出す馬琴の「水滸伝」観が、馬琴が読本において〈もどり〉の趣向を意図的に多用していることとも密接に関係するものであることを明らかにしている。

本論文が着目した、読本という俗文芸界の巨人である馬琴と雅文芸に立脚した桂窓との交流は、近世後期の文芸のありようを如実に映すものであり、更なる研究の進展が期待される。

以上より、本調査委員会は、本論文の提出者が博士(文学)の学位を授与されるにふさわしいと認めるものである。